枕草子

二

太政官文庫
和書門 類
特別 三二三四一 號
第二十七番 函
架
七 冊

内閣文庫
番號 和 32341
冊數 7 (2)
函號 特 27 16

共七

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
x-rite colorchecker MSCCPPCC1214
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

木の花は

梅乃こくもうすくもこうばい。さくらは花びら
おほきに、葉の色こきが、えだほそくてさきたる。
藤の花はしなひながく、色よくさきたる、いとめでたし。う
の花はしなおとりて、なにとなけれど、さく
ころのをかしう、ほとゝぎすのかげにかくるらんと
おもふにいとをかし。祭のかへさに、むらさきのゝ
わたりちかきあやしの家ども、おどろなるかきね
などにいとしろうさきたるこそをかしけれ。あを
いろのうへにしろきひとへがさねかづきたる、あをくちば
などにかよひていとをかし。四月のつごもり、五月

ほのかなるとの出給ひハ橘乃こくあをきなり。花れ
いと白くはさくめくまり。雨うちふりたるつとめてな
とはよになく心あるさまにをかし。花の中
よりこがねの玉かとみえて、いみじうあざやかにみえ
たるなど、朝露にぬれたるあさぼらけのさくらにおと
らず。郭公乃よすがとさへおもへばにや、なほさら
にいふべうもあらず。なしの花よにすさまし
きものにして、ちかうもてなさず、はかなき文
つけなどだにせず。あいぎやうおくれたる
人乃かほなどをみては、たとひにいふも、げにそのい
ろよりしてあいなくみゆるを、もろこしにはかぎり
なき物にて、文にもつくるなるを、さりともあるやう
あらんとせめてみれば、花びらのはしにをかし
きにほひこそ心もとなうつきためれ。やうき
ひの御門乃御使にあひてなきけるかほににせて、
梨花一えだはる雨をおびたりなどいひたるは、おぼ
ろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は
たぐひあらじとおぼえたり。桐乃花むらさきにさき
たるはなほをかしきに、葉のひろごりざまぞ、うたてこちたけ
れど、ことこどもとひとしういふべき
にもあらず。もろこしにことごとしき名つきたる鳥の、え
りてこれにのみゐるらん、いみじう心ことなれど

おかしとよそへのはなりけりつゆ色くやまたおほかるべかりし
うとうとしくめづらしくきこえけるを朱雀院の御時の宣旨にもあり
ちかき紫のゆかりにて御かしこまりのことにもあらなくにつ
まとりて五月五日はいつもおかし

池まで

みゆるまことの池はさまざまの事なれど池ともいふべき
ためしよりなるはひろくなくたださざなみのしけき伊勢の
おかしきりんてしもあり水あるしの池あやしう
なれどもくは事なるれいと申しし五月などさかりに
あめふりてくもりなんとするほどしも此池ぞいとおもしろき
なつくさのみやまの又日はいつなりてもさとしまのまへの

ちとせのみどりなんおほくみゆるとなりけり事
よろしくうちきこえてあはれなることは事なきぞするおほか
とあるなり御池といふは事にするなれどおほくは
またしぞ御池は此池の神のおほかたとなるべけれど御池
めして行幸あるべきのりなんしてやはらかにしうなる事
事まで神くどきよう御池と人のこのよみ事んことにこもちて
御たちの御まへの事又何のおほん御池は事なる那
らんとおもしかくこそは池さやまは事みゆると云
のあしきおほゆるしやあらんこひぬまは事ん
在は事だまとてなりおもしといひ事んもおもし
ますらの事

せうそこ

五月ころはあやしけう梅よりも香のなすとのうちに
またひかするもいつれしうれしき九のえ代はし
めくりひしうぬかしくれなんのうへつくいつそやのみて
よしあしくぬかんとかきなくしまゐるなれはいとめて
うしなへはすのまへもたりへさは立つかへし袖なりし
まかくもりやくなるてあそりかけさひの宮なとえいそ。
ぬいとのよるを御くもたまとくかりなく乃のなとも
さけくえくしまうたまへこちやうかまてよはるともやの
たんしく左右りは君かうの九月九日のきくはあや
ともしのまあをけくへんくかうくせてるれくし

ちし君ゆひは常く月に給ある者くをおほかう
くるくに川めくまくもみまて参くれ枕をまて首つき
まやあんけまやそまはみるかいと給ひとをくつ猫
ゆひるかしてまかしもなし御せてまありつき
人くまそかうう梅のさしかしけしとのつとは常な
とにして様さまく(さまく)ぬかさみなすかれ搦枕りしまおもり
えさとくともむくこのくみーてむもとひは常るとし
き侍めはくしうつ子面表にゐなすくゐとへと御
まてまこともりけくとくく桜(さくら)もも給しう田子ふ人や
あやあるかはちなあまうかちも面れかとくえつるて
かかみし表ひくすまてるとかはりしたてつ梅とまわ

人のかほなどを見てはたとひにいふもげにその色よりしてあいなく見ゆるを
もろこしにはかぎりなきものにて文にもつくる
なほさりともやうあらんとせめて見れば花びらの
はしにをかしきにほひこそ心もとなうつきためれ楊貴
妃の帝の御つかひにあひてなきける顔ににせて
梨花一枝春雨をおびたりなどいひたるはおぼろけ
ならじと思ふになほいみじうめでたき事は
たぐひあらじとおぼえたり桐の木の花むらさきに
さきたるはなほをかしきに葉のひろごりざまぞうたて
こちたけれどこと木どもとひとしういふべきにもあらず
きこえたるもいみじ

木は

かへでかつら五えうたそばの木しなゝき心ち
すれども花の木どもゝちりはてゝおしなべて
みどりになりにたる中に時もわかずこきもみぢ
のつやめきて思ひもかけぬ青葉の中よりさしいで
たるめづらしまゆみさらにもいはずそのもの
となけれどやどり木といふ名いとあはれなり榊
臨時の祭御神楽などのをりなどいとをかし世に木ども
こそあれ神の御前のものとおひはじめけんもとり
わきてをかし楠の木は木だちおほかる所にも
ことにまじらひたてらずおどろ/\しき思ひやりなど

あかりしとはしさゆゑちゑりつまてくこひしは人の
ためしなりけるを見るたびにものごとにいかばかりたゝくいふ
ちゝはゝあはれなる事のひの末まで侍けるぬ姫
なすにやむごとなきいえのいえばくるまもおりしたま月に
高貴にしく思ふまゝにうちなやみてうらみいとおもひのきはまでのさかりにや
をすくるまゝにもおもひ出て侍るまゝのほかにこそおもなし
かうゆへし給ひてありけるに姫君こゝ花をもいとゞ御の
ちのなきにくもりしるをりのりまたる庭のうちに
おりし時そらもくもゑくやうにえだごとにまうで
こゝかへる人なげしのごとくてありつめるゑ゛いけし
るとのいとゞ姫君にいつ(?)ゝりはらゝしけ給と。

何のんあるまじくおもひて御乳母とは常にきこえんとき
なさけらぬ身のかなりやたまひてもめのと侍りしかあ
姫君と思ひけりしにはりしうおりし給ひてこゝちせ
まだ入なるしくるまに侍るまゝにかとはいとねと姫の侍
見しにうちつけのにほひゝさんのおりしたなりのはかなき
まやまのうちにもれなりしの末の乳母をばゆかしかるへり
いつまでとある御返しにも姫へまゐらせしにつけ
まゐるもおりし給ひりしなどいはんその母しく侍
山寺殿中にもいとゞ宮ほどなく三位二位のうへ君さま
うちとけたる折々のおぼえたる人のつれぐくあるをんなて
たまひけりおりしも文事なりとあまつ侍りしくもはゝきこ

いはとなく雲井にかよひてはべりけんまゝへて参りて候
されとのみことのかしこき国にすかりさする御ことわり
ろくじはみゆる三十なくとよろこびいみじくは参らせ。
いひつとふくとも於かにつたへるとも。ちゃうあれ作ともの
おしむとも、かくれはる梅まで栄えと来る春もしも
おもふしそ、えくに、御ほとりのいみじく梅さやかなり。
はやめをたる事ぞいとあはれなるけるを見る思ひつゝ
むかし思ふもあらましくれのなか。哉らくしう
見こへまうるし哉やし言はしともしる中まれなるべきの
月にほれば中々見てみ梅がえのはなをりなくに
さえぬめてなつく入なくなみのうちもしるらしやと

あさまだきなくうぐひすのこゑぞはやしめでたく道にたとし
くはるひるをあらそふるにのおはせんとしやゝやゝ
ひさを待とまちのさかりもいとをかしくなれり
の神のまもりにもいとあはれむ千代のさかえ給ふ
などかはつらつもいはずかれぬまとよみたる
末ながくめでたくわがきみの御代とよみて人を
寄る年
あと家の梅のさかえの久しくもつむがたくはしき君の郭公
くれなゐてみこともわれもひきとかかりことかり川
みちるはあまりいひらんしそ程れし思ふさへくさの
まつはあはれなりかはとは羽のものまちかへすらん

とかりかゝりありしかぐくひとゝそのにたちまくさ侮りける
らかゝるとかりし我身の夏秋乃ことゝもまぐくあはれに
ゐるしなるさゝめる中にだに年ゝ月ちりすさめるゝ程に
正称ゞ文殿なりぬぞいづかたなしとかや聞ゆる千年
むかしはつひくかしうとぢてに音もせさるま
來ぬるまでけふといとちのあかくとあの産衣の袖く
のたよるまとあつらし侮るぞ中ツハある一の家
乃擬孔中なとりは花やこのによなれいくくるや
かとくなのことはあさきまし月まうくよりうち
すら出くまでゝ侮りだち一そいのへしさめてくる音
来し六月なりとふきて侮ことやりおと世ぬの我そく紛ん

なくるくひとはしとあらしくさくまし其のさら
とたちくてるすかりまし侮こと中なまでおかとりけ
ありしくちあし人か成て人をは見る人やまける
鳥孔中まかくすぐむのことあゝ人けりけり人やら
くひとゝ侮えなるとりは見かたまでとゝ侮りぬるちるを
はみゑとの孔をむなく我が水とゝ出るすそことさひ
てなくくりかくこく纔か人をて孔たなくさむしんがやら
わらはの道あるり谷底ぞて昔ゝほどれかゝいとに侮
く侮しはるまでゐちたる侮りある来てもなくしあ
の空井まくがゆきんいとめてゝ〳〵しかあか
来むくめかいゝるかの中なかのめくみとかさいしとみぬ

よ修しは世をいとへども、よ修はなりうしてそのちるもし
うらみのかなしきかなやひとりのそ務しとぞあらう
そのうらんしそれりし常にいとあそびなれわらう
かくいのぞわはくだみめう色のもおほだらかのらん
なといとわりしだくふかり
あてなるもの
うもてえりしきてらかさ日のうきらん筆はうひのにの上
はらう文ろくおくさうしそのかなまうまうりし入てう桜れ
花えりし雪れかまうてつるいそりしうはくしそらちど
のいちこくのたるかまれこめくみのそも傍そもそいしやう
の珠数

むしは
よく虫松むしはちまきをまかくしてうやまふ。
むし鈴虫しはうはらのむしいとあはれなるのにわよの
うこけまでおぼえりにはくおもてもおそ修し祢て
ちうあらんとてだやれかまのきかのぬりし今
秋のせ梅らんおわかにらずこんむさ数よくよわらりて。
みずからいふりけるとしかす風のちなと思くさまらく。
八月けるみにはるまでちてとくとげのなす前のちるを
いかしうたあかきまれわ日ぐりしめずのはその虫文ぬの家
なかはらまう修りし道心おきてしはきあるとくう
むし文思ひりけきくうれ示なすどうはとおんそのたの

きくはへこそおかしけれ。まで色こそにくくさ
愛敬うちいはまほしくなきもあひさやうなくふくき
よめの、人ゝしうかれいづ色々のあはれやうなりあう
秋などの秋の物にゐかほなどにぬれ足してゐるなどよ
ちかくなるてんなどとら人の名につきたるそいとう
とまし。夏虫いとおかしうらうたげなり。火ちかう
とりよせて物がたりなどみるに草子のうへなどにとびありくいと
おかし。ありはいとにくけれどかろびいみじうて
水のうへなどをたゞあゆみにあゆみありくこそおかしけれ。
七月ばかりに風のいたうふきて雨などさはがしき日
大かたいとすゞしければ扇もうちわすれたるに
あせのかのすこしかゝへたるわたきぬのうすきをいとよくひきて

ひるねしたるこそおかしけれ
にげなきもの
げすの家のあやの衣きたる。しろがね
さるかたにつけてはすさまじきさま。又月のさしいりたるもくちをし
ゆきのふりたるに、げすの家に雪のふりたる又月
のさし入たるをいとくちをし。月のいとあかきに屋形
なき車のありく。又さる車にあめ牛かけたる
たるをそておそきはなはかくて又わかき男もちたるだに
みぐるしきにこと人のもとへゆくとて腹たつ
みぐるしき老たる男のねまどひたる又さやうにひげが
ちなる男の椎つみたる。歯もなき女の梅くひて

もろ〳〵ある。童子丸井のたうまゐりたる。此ほと給ひそ
若しのこりそあめまゐ御恵ひ給ひとけのやうかまへ
ごぬすぐことにとりやしまゐりの文入りよろ給ふる
あら人乃こぬたる都合給くしたたちき夜のふ
もへ今んは恵かあふさばらけはしきん参給りのやになると
たゞ子ふまたにことるむゐ位荒人へのたうぐわんとう
ちいのくぢよりなく参らくしきこ給り。わわくち
も人童ずもれとて此世の人ともりたわりひめくず。国
をざりつん合鉢りかうすを入乃うちろくかれ給そ
とのなどにしのびて入ふしあるかそいとはさな勢
きぞく音さも給しめる参ちやうりうちりけ

さるはうさの給ひ御恵りいやしつ参らくし
かくんのもとぞしえうし御くなすきらはうしらふまへ
のきあるひ給あ恵。給ぼと給あのやうにくやの給ひけた
らむりど我にまいれきやりうの人くなりわ此はうきの信
とを。給ん。しらくそでめてまるもし五位のくらふども
かそ成りし人とあまりぬくなりけることゝ給ともの勢やも
うしみす。よひらせくぶのるとどいふりし参よのけなる給の
ごふと給うわしえんなどに給ふのはくし梅く給りし。さぬ
ともはくらんくばしぬゐのあしるとうちるべくてくる
一ふく給りしへめる御と矢たらくかこたちあすこてく
なのもくしたのぞとすかりしつ井てなすかしまなと

いみしく行たひつるよりはましかなとやすらひて
さらにもといひやりもしらすいはるゝのきぬにみえしり
なにくれかうし月影むかしの車あらはれたる竹の葉の
なる堂かれよくみゆるめすちとゆめる記けしく紙にはし
きこゆる人ありけりおもひやる人ありつるかと
おもひある所を見はるさしおもへる所おもしき
おもてあまた下女のきさくけしきのうちやさしきに
されしよりひさしく見せきぬ物語のわさなりけり
かくありつゝよくなりたちのかはりしくておほ
むすめおはしてもろこしの年きて御れまでひさし
きうてわたくしのはうさしきてくるといとけさくしう

めやすし。みなりけはひさのかたおもひきこゆるやうはなきにて
むすめしつかはしくけしきにて時々もらすことひとへにかなしき
ねのなとはひさありしかるにおほかりせしやうとしてそおもはゆ
き字のかは女房にひをうしそれのゆきといふ人しくひさし
右近の君なりといひしいよいよもてなしいとあはれとし
無えのとおもしろけはゝさと思ひおもひまたとも。しも
よろしき御前のあるしかくてといふにさんなりてなにわろさ
やうきゝはざりし内のめくさとるへのみことにくへ殿弁
の人どもの手いとく久しうといひたちはしくまはなし出
てききたまへと宰相内侍なるをとおもひまかせ
うはさとりうひたまふ大弁つくもちつくるたて

さはさりながらいちゑんすのおとゝいへにかよひしまことのひとく
たまさかのかゝる事もあらばいひ出さんぞまことにわれぜぞ
とゞくしもなりまことのこゝろやすくいふしらるんしておかし
およびがたきことたくく苦しき事のなくてこそ有るなれや
うなづくばかりみな人さへのこしましたまひぬ程に悔しう
其御方と御後見と御心を合されまたまことはなくてなへとぞ
然れど御おまへにも宮のしのびて父さまにもしめしてこそ
はゝうへ母君もかゝる御ことにて候へばこゝろのたけのあるかぎり
はくやうせよとまいらせ候の後かたき事ゞしまゐらする人の心をかへしめ
きぬといひけるにもひとへにせんかたなく申さんも心ゆかで候き
あやしのものとてまた柳といふものいとゞひとつしてなにとなくけふの春

人くるしめていひわたるものを一生の事を思へばなし
はじめ御心かはりせしより此君しらぬやうにて人をにくみ
まことの人のやうにおぼしめさるゝやうにみえたまひけるほどに
せめてせめて中ゞもろともに何しつゝけるべきことに
うまれしおもひをすてゝも世をすて母君をもさまざま
はゝのかたよりゆきゝも思ふひとのよしをかたらひて
よそのおもひにいひなしてはゞかりのあいさつやうつせみのはかなき
下くるしきもおもひいかにかくおもひもうらみてさらぬ人な
びかたしつゝいたづらにかくいひわたり候のちのことどもぞ
おもなくしてはんべりしかどのさまのかはれどもおもひにも
ほそくぞかきやうちまくはつきし人をおもひたまふかる

まけしく御前よりさへおしうちひそかるめのなと
ちいせさ給ひとくもそのえしめいひたちえし人を
さうぼうとなする御もよひ乃たせば給ふまとおらく
いひさとちは候りしそあこかはてもこ候ひしく御く
てかそく海のうだざもすんやそきるかやにかいら給よ
すると給ふきますふさ人の候ふてぬるどいひいつまとさし
とう歩人の手すおかと給たおんまと候おるえりきてとぐひば
ためもとおのかもとかくちりそるをとしそう給おえば
まとうし給ひんやゆまてどいかかくの心給わんしやう
と乃く給ふまひ候くおうたなりし手の物もちつ給な
まもののくまえんざそおくゆるもなしとまでうれくるまま

まいらすとおやしうまたちくいはく中ごもしるを
人くみもいたはりかうこうぬとなしくんぢうあきえ所
ふみんくなるとともせくうりしやうのくまいらせぬぞしくにく
常なまは人さなりん人まえ思ひしやうの給ひ行
よろまくにくくとぞなするけしくだたなりんくそとぞの
うらみん河原の中にわたもりかなまちたちどしてまと
また給ひぬともまきて給えしそくあとし給ハさりたり
とおりぬうし三月はくのめのさうる乃なり御しのが
みくきまやおくんぷへのさぬぐうにくくなと上人をみる
さぐいも給のまはとめて日ちいしゆるまて武蔵のかとぐ
ひさしに給くるすりおくの御内でちとおち申さる給

なからへぬる人乃御かたみ宮みたまへ出させ給へとまいらせ給へば、なき
ことあるへきにもあらずと思ひしらずしてかくれ給ふ事なからん
まゐりてそのうへありけるちゝみかどの井桁とふすなど
うけたまはりぬるうへにかくおほしめしてちん
よりおはしますのちも御らんせよと上人乃仏申しける
でらうちにくへきのいたしうもあるにおほしなくなりぬる
せうとこなかしたせなからて思ひくちなりにかへりまつる
らひさとおもせさくなかにもとのなどつく給ひつく
きてとらくなみいなすと来しあなひくたすはめて給ひ
みたらにをかあんをくみなうつりし当時君にけり乃
さうなんしまちやうのうちさしいつくもくもりなき

さくはまのすゝしきまゐりたるよりさらにかくれて候
おはしつる人道まゐりてはかならずおかしなあるとおもひく
みことへきなる御事ことさらいひかりけるとよくおさまる
それのさしいつくあるほのきたのなをかりぞえかそて
いえやまうまつるはおもしろかなるにはさましとなる
ひさかたのかはらやうれしきをしかくる秋と後毎
ましそれそれし昔まさりてたゝくりまつりしとし
はるかのちをもとくちにしこともさかへみなくる
人まかせのありむかしくはりてかはりとへんくて候
言出てくいふしるなおさへてをふんけるかさねとのる
またれにて思ひ侍れどもあればかりてさふらふ

なすびよすてつんしとのつてまりしかりけれはさらくとも
とりふかりし母よ孫おもよめるりかなさん。とよひとひ人え
ある人乃はかりに行くかへさにして又をしえ
えやも敷こく世のたまはるなわ又う人のむくし
はるなりしおるをえしつゞるも守るもとくへされ
よりのちそはか日のもそくれはちくつきさるゝしき
まふみかりし世の上下おなてゝいめんしそおもあしし弟猿
御前りし人さふる姫おほまて宮ゝくとふてもおもし
あし声をしくくにつきいはるをう人乃はつかる
の記んかしおりてかしかへてもおもかなくてゆうりし也る
人乃ちるれりまそ姫ともはさふる殿んかし又宿猿

よゝ世なぬ人をもとこおもおまえりかうは弟さらんしもそいて
おもひんなかれまよし世しもくに宿くはぶむもるを
おもしはそぬなりとききて宿とるりたてま只おもの中され
猶しけく所乃声をくめ君の清るる殿人のはとさふらの皇
めくたほめりしくらしかもおもとゝのるおもんまたる
ひさ海つふ文とかやゝいふおもかずさ升ろし御前のうさう
むくひくさらし頃さ海ろし猿くのかはるとごふかすそ
おもし言れかそろ毎うなおもかぽまて人くさふる宮
だちよめやたるぶいめんはゝくるまつくぬらし拝ろ頃るも
いつろしとかへだ清ろる年中とさ中ろし清めて絶る
まゐ毎さひ頃もてさりかもとくへ君達乃ありしへ言まきて

いかめしうてたちまさりつゝかくゝくたくたしきに
さへしらぬふみたし　そのおもひまさるといふ御けしきを
はかなくいひつゝまゐるほどにおはしまさぬ程とくたり
そのほかゝんえしくすこしのこものはかなく人々みひ
こすゑの御心あはれなるつきぞなきことのぞやむ
おなじくいとほしやかくてよ給ひし後たまのこえ
まことに女御の給ひてよひまて御らんじていとほしく思
まことまれからもなとうやかてめしあつめつゝ覚えくいふまを
御かし宮はへ御まゐりなくとよまでて参る
給ひぬおもかんもあしるまね御まてとかきつけたり
はかなきばかりぬるもとき給ふかくらゆるさめての荒人某

まゐるほとのさきいて給ふくるまたてよりしたはかりてすこし急
きと立ちるをみれば女一宮の御くるまなるとはさなき
よしやつきの人とちごもりていえあるくちしきをみたやう
あるおもとれたちまする人は御とものいとよしあるまゝり
やせのゝめにおそくまてまゐり給ひつゝまたこんとおもしは
うち侍ほよ給ひつよかたかしうひたこえのなかりあし
かくそのゝ侍しそなきことものたえてはまてとまうふ
たちくゝしそいみしさにはかな御ものかれいとくもの
きこえるけなまゐるゆゝし車(くるま)ともとめさせ給ふとちかる人
さかなきおものことも御つまてちたるかとうんかく侍し
おそくのなまる男(をのこ)たちくしんなきとうんしぬ色成人の。

くゑもんのえうの女乃たいとかくれけるうちこそぬすみれれみとうち
なりまたはつんせうるえしは車のうしなすとそりけるとやか
みゝくうちそひさるにそわうりのとさつんしはうらを
ろくかるをあしなそ人はうみそわろうをもの衛まいを
時くうちきしてまてかさ権となりまたはつんくゝはゝこなさかへ
さまらうしなりのやはうひ人なとてそかあるてすくらへ
のきこたかかちるはおあるましくらん御まいらうしる
まるゝ人をきこさは有人とゝく使ゆくをはらうとちさ
乃のみの大臣のやもまちみそをれしおはつへのあまゝらん御前き
いとおしく人の大臣北門乃まをも見てむかしもこそなきわうひたを
きたゝりのさどしてひあれゝさる男はちうよおるとれ

ゝるとしておめこてれすなくわなくゝとのかとおもしおはれ
ひまなくてしとさのくゝめるもまはいはし六人たう
なするかはこゝまてをむれおとらりうひくゝそはしれてあは
ぬくらこのなするおやしきのゆきみとたちかさるりのるを
はらかうめるはとうはくし車そゝ泣くつき給へ
ほしなとしそ又またさていてつたる摂政殿のいとし
くつへかるいとおもしよ北政所中門あらはくゆひうけ
の車政大殿からいみよけちるなとしまてゑう北下はさま
のよみひはとゝみちきなくすちにそちきるこしそめて
たゝ今の太政大臣の下かさねの尻はかくとも
はいをまつこのうちすれるすとしてかちこの車

いかにもかくし文字をおかしくはかやうなるにひとつひとつ
みだりにちんの出入いとはるへし くるしからず女のはしとぞ
よけたる所は出さずなりけり 友人の外さまにも
なといひ侍るへし

たき

音なしの瀧 すまの滝(たき) 清滝御手洗(みたらし)ほしに
りまし 宇治 そめての布引 ちちの瀧 はくの
まあるその所 かまへなすべき也 くもらす其のたむけをもつへし
わするる時は それもつらし

はし

あさむつの長柄の橋 あり ひとつの長柄

ながらのはし ひとつはし 佐野の舟(ふな)はしうち
わたし やつはし ほそのはし みをのはし けた橋
せたのはし 木曽の棚橋 ほりえの橋 かささぎ
の橋 あはれなる 中のうき橋 やまとの
はしなとは 夢のうき橋 かささぎの橋の

里

あふさかのはとかすがの里 いさめのさと 人住まぬ
ほと たるみの里 はるさめの はとせりの里 うちの
里 伏見のさとなるが 井手の里 はつせとか
とをつやまの あらくさの さとかやはら
いつもとすべし

草子

さう紙ことはおもひいとおほし条これおもむ神代より
こゝろざしかくさしとなすわきまへいへるしるしめてより
そのはじめといひとおほしがたしたゞしも名これおもしちな
人のおほくきゝてしるはみなくより心得もしなる
花こゝろより色まれおの紙をかうだにおやのりんにて
おすとおとこのよわきたおもしおや梅をすへきし
のこゝろひとしおもふらんも常にものごとしおもふしあ
なきなるの所はまく草まておもふる京にとけのなくはな
れなるつまおもしれこゝひよりことおもまもしくつきやま
あなたのはことのいしだいなすどうりえにおもひなどや

あらんとおもふかたがたろき事なしぐさまで思ひかゝる
きこしやなうらんと思ふことおもふし又ある事ほど
なるまやとのつまてとおもしきのふ草いとなきれせ
風れなきさし出て侍けるはさなどうしあるから
よおひつぐめるなさいとおもしよと共にとおもしに
花をれのとおもしはまちの葉までましておもし侮
ろこそげのきくさあられさたゞせなさちの
とほらかくさといふものゝ風ありかきてさらん
ちとしそのなからんと思ひ風らきくおもしけり。
なつおもふしまいとおもしんもれうさ葉のから
ふけよくのどこのりすめる池のおもとかうおもかき

なするとぢつゝさられとぢ詠にわがそくよゝひろくあつまる
いとおゝしどろまであまたく抱よしはあまたして
人ゝすとぢよのふいころしあゝしやえむぐらゝ山さけ
やまの井ぢびうけぢえ庵はふかゝしぐむの風ゆり吹くさ
まゝくゞし社いとし詠くうんは数おゝし

集々

古万葉集　古今　後撰

哥題ハ

人やこくぞみかをまあつあまほとゝぎす
まさひろことたち桜なしあさぢ志ぞゆき
はずくるーなにめあさうぢ

菊社花々

なぞしこゝろのはなうつろひやすきとめてもくしざさき
きえしぞきやう菊社そ詠くいろひくるぞ咲ゆゑ
あきらくめんぞくげしるをむかしあれまでごとゝえれ
みさ露のまてそ世中りいとはするやうなるゝ詠あへ
まくげし出くるいとおもしろやきかとてまてくぞ人めか
まる色の子とあらぬまゝでがさ清めの松げ
なりぞんでうしてあかなるゝまへ社あるまれとぞじま
まう詠てるがるゝのの花ぞまゆら移ど葵の花ふ
いとよのくはらくまと秋やくさくおもしろあなるりぞふ
ずくれしぞみまだおゝのしやう乃ぬそうーおいて

むかしなからうしろとは春秋の夕くれそはさらなは
ふくかひの花すゝきおもしかるとぬへきなの似たく
まそにたくか秋の有様しそいとはかしけきさかるとそれ
物らはおもひ出たんめの涙ゆかなとこふかりのやうにはふ
あまりしけれはまことにならすなにたとへんかたなし。
あきの花さくうへんにたよりけれはまことにならんくらきまで
いつまて見るかの綿にへなからんと思ひつゝりもなかなしや。
そしもほてはこれいとたえなかしの秋の水のはかなくに
おもしうつそはらへめるおかはなるまでりすくふか
きいまきぬれもあ風しと人にあめるか秋の野をきしきえ
いうるはしさかうすく露りしおもあまりはさはのすへ

まいとあはれ多く朝きりかきりぬまてくちるゝひたぬる露もし。
はなやかれ梅やそあ秋乃あそてらぬとんとく綿
なすのかくこりみてきさかれはらし花のかたりとれ
色もちのきゆるのちかそれ出まかくかしらいとさろく。
おかしさ色をこそむりし思ひ出かけるひな
うごひろきたくゆふ人りよそいんしうにゐめ
きかの秋ちかる事しあちらくかまてしりたんまてとも
おりふし色霧し萩そいとゝ梅の色かそんしたまやる
さかきるか朝霧りしぬまてくなからしくとかき絶る
すしみ深さ城しうのかまひてたちなかまへんを
ゆくとなりかしはつひまつかきしやまをくれんくをやは

日数ありしまゝにひとつかたへ十いくむなんかなしみをなくの
若葉の山ともえ出ておりしも花のちりかゝりて猿
はるゝ山吹のさきにほへはしはしもとゝまる事なくけるを。
おもひそめてすゝろなるところ〳〵さまよひありきにあかし
けるかむかしそのころくて枝の花さへあそひにつかはしけるを
おりし雨そゝきさまのわけぬはれのかへるみちしかりし
すゝめのはらにみそれさわくある夕たちへ
おもひしのちはいゑの
十二年乃山こもりをとちて女性をやしめぬ事はりやよし郎
源ありあひてるおもしろくともそはるかに尺
ともさそはしけるかとちることにいかにもくもの

の心もしらぬかなしさにもなにとなきものかなしみ人々
かくもかたりすなはちそこなるところのいゑあちこちありそ
くりかへすともかへるにわかもいつかはしるよしなるもの
まちこそあはれ人乃かなしみにねもの
あとしたるわの
暮しみかへりつゝひとひまもなく月にまるをみてる事かな
あとにたえぬと人乃わらひとるまいと思へる
白露のかゝり田ひとにしらむを待ときえすて雨と
きえなんとおもひし人なるをかくもいはしうせめる夜と
よあかぬ人とそおもゆるのしらぬ身のおもひかくる夜
かくしての月かたちにぬればかりもいかにかきよし

かくて後ひさしくて雅はまたあをやぎをなよ
なつきたるとしぞかる日かへあまたたびひくかし
落花くのひゞくる所ありく八重門しそかはし雲まで
いとゞしうえじりのそ山家のいとけのちかく明ぬる〳〵。
は申将にてなすりぬ夜とよりぞつゞられ明けるつゝ那
まはいゞしうかんわれたち出てぞ冬にてうしは文
するの九のあまりはひとりえりしてくへどもとも夢はかとう
みくみて隆まへるあかしくものたしくちにてゆく
よそひと三年せうなするぬらしくかりし帝まで後の
いえしめてはむそこの入かり心入とうはりましつくさ
まくいのま後をく橋乃枕くくれるかりに中ゆ夢も

かくしおほんとなりしめるしてまめのうちかりにて後に
めなよかくたのけむべみしょとの梅しくも帰へつかね
あゆくえりなするまくえりしまぞ此くにゆるもかくし。
雪さしかぶくとぞ後たるべし尾をにともありなす
くあうちくてくひ文殊しもなくらをとちのつゝ
常なるとする人のちとれ内にまくおまし人くれかくとお
なもいかりつまくこえかり梅り帝もなのゝ塔
さとなする林のこいるく八たのとだをれくえもしくちぬべき
ちのあやもぬくむかつまし雲れだになりのやくうしうられ
がえくくみそうちとかりのくいつめとともお那
日のしがんなうおきちあかう殊いきりくも中まかなを

ねられんまゝにいひすさびけんしらつゆのきえやすくかなしき
おのつからくちをしきにしもあらず此みちに侍へしそ哀しう
人傳にはべる事しもかゝるやうにおもかゆるふみのつぎ
出くはえいはむとてあるにたゞ今のうしろにちひさき
或ときは下行水のなどいとおもしろくしげりたるとみえ
まひろのおもにはかなくいてあはぬなどしらずなりくるも
いとはかなしよろ人君だちなどのことかなりしそぶらひ
よそながらのたゞ人などはけにあるがすまゝあくる中
あともやだにくるぞひとつはなすくなし
あはれなるきみの
おもしろくはあさましくむこの文まいらせあそびおもいやるなる

のみやりのこまかく清ら飛て此字のさまこゝろしら
ぬ人のうちさは中将とせさせてかゝちまと河
あるまゝ清けしもとくまてせうしあるほとにいさゝかの
きよげなる殊人おなじ事をもいひ人のいうえうけむち
くりなさくるにや思ふの清井ようくぬしそうて書き。
趣あるをさるわかきにうつくしくすむほよぬこともよし
さるをしなすとえもさこうしるとかふしてうちもとかゝらむ
しるをきなる帝しちるをもきてきよも法師をもまうけ
みゆくそのすかる人にておもふさま中よりとはゆけひ
よきのさまむさくひ殊くなりてはあるなめてゆゑ
みなくてあるべきさまもちたるは文いへし

そのおりしもあれあなたまで風いみじうふきいりて。
雲もいと涼しげに雪あらしまたなどの風のいたく
ひく人をも侍もつとおかしげなくてやうやうたなびくの
のかすかなるもあはれげなり。下ざまなんせちなるとする。
まづひあらくおそろしげなればしてるどいつもおりし。
有明(ありあけ)おはりんしうすきまたかう庭(には)なすとうぢおはし
てあつまりくなと殿こし給ひて御前みもおなじを捧
給ふうち人なる人々みなおなじなるそしてはかふかり。
やうやうあまりうくわれたまりんぢんまうすとくうらん人を
てゆるはかりまうとくるりとおひつるみやくゆくり殿上(てんじやう)
人あまたしらしくかたに一しまあふかともしじして
人々とはまほしげなる人々しくいみじう月のいとくま
いでゝるなどめでたうおもしろきをいひいでつゝ殿上人(てんじやう)
のみゆかしかりし下にゑんさまでもてあそびかはりけるが
事よりくるしき事なるがはかなうしてすみはてぬのみ

おぼつかなきさまの

わざと思ひたちくるやはばかる出でける人々などのうか
まろくなさけなりける人々をいひすぎにけり
まくすもはかなきことぞこのあはれなんとこそすぐさせ給ひ
てかくおかしやをとこめく事のはばかり候はりけるなん
いかゞなどことのかたにくさきなるしぬくよ思ひ
さる人々とそしりくなくもてりとうらさく思ひかさ

なまはとこの昔しく人
いとをしけれ常なきもの
人のよみくさしたる歌乃はしめはかりきこえて
きはなれしやうなものあはれなる人のつきくえん
侍りしくえんといふものまつはしまうづる人のかゝりな
ときさるまりかうのそく庭の音するもりにかはりける
くるまたちてゑりもとしわてひとくまゐるなる
つらうけなる物
うちゑん乃かくし神楽のみんちやう池のえちこもの
いつはめくしあひする御まやう乃馬むすこ文御
まやうきの梅の花もる

ゆかりとそくる物
これはの小島除目乃中第一の國えたる人御佛名のあ
したつこくさ御ゆ屋の城となりましして宮はらく物
さ物語ふかくしうゆくしく筆かきうきなしうまうん
ちうしゆう御うれまてとはしにん待たしきくゆし
さくりかう色やはかく旅めしぬ雨いてかぬるそてつまく
なるまとそく殿上人のゑんはわかりめしくはちのそひ
あかりみちうとれお納言琵琶とゑらくぬしちおつ庭さ
のまれはうのことれよりを筆はまされ中将やうれ
ぬえたのかたとれとし給しひたれのそひくく八琵琶
あまりかへてきおそなかとり中納言家のひわのしきへ

やめて物語せらるゝ事をおぼしいでゝいはせさせ給ひし
給ひしよかくまで妹しなかりしをなほ文おほくはべる
をこそしけれと物語めでたきやうなきやむごとなし
とくかくてある御しるしなどのほどにつけてある給ふ
給ふとおもへるのほどにつけてはべりけるやうあらはし
なかにも頭中将のおぼし給ふることにくからぬもし
うちには殿上にもありける人と思ひけんすぢ殿上
みなもいへ給ふまでにみなききてもありけれと
うしろめたきまこと御事なれどもこそおなじめでたきもの
その頃しのびてのたまはせてあはれさに心と
こゝとのさまたげある事をおぼすほどすぎぬ。

はかなくはかなき事ばかりにて月日のほどなく給ふ
まことのかたゞいふほどそのぼるにすぎ給ふ二月ばかりになりぬる
の頃雨いみじうふりてつれづれなるに御前のい
みじうのどやかに人々さうぶしきをりしもあま物
やうやう春めきてなんのおはしまさぬと人々よくある
またおなじよにあらじるみなのいふくておはする一日しも
まくらして手なりたまへる物のいとどにいとど心ありける
人わざの御下りの下りにちかくときもせくはしつどひ
きこえんちかきほどにおのれしやがてかくしもなめく。
人はかくいひとずさまじきものしてなほかり
のかはらんとゑいでてそのつのほかのはかなくれんまで

そこにありまさのゝかくおもひといふありけるたりしきりに
ふとおもひよる風ありしいふかひやしなひのいのちのをはりは
なにかせんのあるべうとてこゝろはさまは受領司なり頼もしく
まへはてなかりてやまひの事をしらんといへとたゞれし出ちく
とふりける兵衛中将家のたくみわかれしかたく人の
やくといふありけるにしたにてこゝろもなきこのかなへる御文
なりんとおもへどさてはいまはたゞこのあたりのありける
われ今はのくるしさにもすこしはおもひ入てくださんと存
るほどの御心のほどすこしおきてたのみまいらせ
さらばまゐらせつる文をまゐらせてさらばこの事たのみ
するやくそくといふありておやしきのおもてのせ

よそにまはおぼしめしやうありしかと思ひながらしかるべきた
まつるはかりごとをもてなしはかるは何ともなくしてこそ候へ
然れしやう此花の時錦帳のもとに書くしたゝめていかなく
しある後はいくさのことをしらんと御所のおそろしさなりけるらん
ぜひなくさきをおもひまつのまへにしつらひかりしるしとしくしき
まんなかりしかりかのくらんをかんじくわしく思ひまゐらせ
かくもなくせめ候ふ時入はめぐりわくえりずに御門の
きくことをこゝのたいしてありさまいかにかたなきのかぎ
おんとりわけはおもくとりしせばまとおとこかもののおよみな
ねのくはなめぐくいとくものかまへおしまてまつりは源中
将のことしてかなしいはりやあはれくとかなしく

さうとくだにかくくのさ人〻かなそれりのそなくらんたまへ
うておりとめ給ひまいらせ給くやめてまし〳〵といふ。
あるうまへしをにあつまりゐたる人〻まかで〳〵こ川給ひ
まいりける地御とく来べかりつるやう頭中将のさく井
とこ給ふそです〳〵人〻ことしきのかたきの六位まへくな
はまかへくさ蔵人のとくへむかしし今とりてさすて〳〵
はのとくて将監のもむかうしさえてくさしてなくるを。
めしいそつるまてとくやさまでかくいさゝの何ともも思ひ
ふさうでけれは又なるのおと将とかくかけむまいりしとも
けるめきてゐて座となんむかしとくみえいかへ
せさるにしてと御ぐ今さうん給ひしてくへ給ひゐる

とく〳〵殿上のばうさまなりしを文をたまひけるして〳〵
神げくにて人てごこうさひへさせしひとつかひてそ
まて文をよまへしかまでとひまし見るくけんりの
あのさうのに座りく〳〵ぞとく梅のきさたちけれ
とくらうし出てゐるおほはける文なりまなゐ人〳〵ておる
うからもらうんあいのいさあぶへいひ座しかのなすくるまぞ
とくみなるよりてはるるりいつかそ文ぬる人〳〵の那。
かくばえてそうまいけまでといんさうやめくまつり
おとはまとくやこん源中将はまくらむつかいふ来ふ
くゐてはまかはりひくなえん座とけしけるか
かうさ〳〵ずかくのはさ〳〵右近の事ありしとなんけり

めしといへんしなげきにくれゆくまゝにいとゞひとりむせぶ。
御文をみ給ふにつけても常にもまさりてなかんばかりなるを、くらう
さなたら給ひあまり候ふとわりなきなげきまさりて。いかゞし
しんぞくちかしきうへにまでとりつゝ、いかなる陰陽師たち
みなかねてしやうにてはかりかたく候とやかくてさるまじき
はくもしのびかねてはふかきあはれとぞかなしぬめり。
何かりなりたまへるとおぼえんとこそ思ひとゞきつゝ一かの
ことはりよき給はりしかば、なかくおもひあはしてなげん。
かくてのちんはかなくなりたまふ中にもとくとくはなし給ひ
あるとけることにも中将殿も心にかゝるなれど、
ことさらにはくらべきぬさゝれてもさとりあはせ給ひと

さてもりしは頭中将のうへにも。いたはしきかぎり
あまし中くらやみにて心かくてたへかねしとひきつゞり
なさけんとも給はず。まして心ことはりわりなくおぼしぬ
そのためをもわすれ給ひて思ひしかども、みなのかへりだ
みあはせずぞろに人のはめそんぜず。せうとしをそゞろ
とおぼさるれば、しばし御下向をまちてまいらせまいらせ給ひて。
さやうのことにはいかにしても。にえさぬきくふかうくしきをうち
なん給ふおもふもことしからば、ことさらにくれよとまでと申せと
あらず。唯人ありしがいへをまつくれのみゆるとはかりずとせし
ひまなしんぱいしくたわりし。みせうとの見えくう
給ひけりしとおつまきこのをはなかうんれまゐりづかたぐれ

やうなしおもとに文見がほしさやまさるかどかどしく
あえせざりける事いひてくるしくなげきなどす
とく殿上まゐりなんともおぼせしが事は少なかめ
めでたき人のためにもかくいふことなどもありき
侍りしをやはらかにめしいれて少将のはかなきさへも侍ち
むすびつけたる田子のまゐれるなんどいひたるまことにさま
ざましてさぶらふのをかしきこともてなしみぐるしきまゝ
言ひなどせしなりなんどもひとつにあはれなる。み
ひとつかなはでいかにかせんまゐりこれまでこれもあり
かしこまりてはさらにいみじくせんともおぼつかな
それも物語あるまじきにして身のおもはんともえし
たまへるまゝに御らんじけるところをとくまゐらせんとくなりぬるを
うへの殿上人どもくさくさにまうできて殿上人どもの
ことどもみな扇にかきそへてかきつらねつゝいふ
あさましうおかしのいみじけれ事にはおぼえし。
梅のちりし袖子などところせく思ひたる花の
めでたしかへりごとも。二月二十日ばかり宮の御
ざうしにいでさせ給ひしにまゐりて梅つぼ
のさきのことなりし又の日頭中将のせうそこにて
そのおほくさきにすみたるしかばいひし花
さきはただ色ありちりしゆかしうあやしうぞはべりし
梅のいろしかすかずいふ事なりけり

うせくるまでとおもふにまかりしかば清水にまゐりける人くさ
あるおきなに扨ことのやうみてしかるへきよしさとせば
まつりねひさしき扨おきてあまたの京にいふへしとて
人のこゝろをせめひしかしとて扨あまた候しぬ。
うへかくてこそはへらんなんとおもふて清ひしのことよも
あはれ申さしとてあしく候のみにつきてありけれ
のちもやとてきくにほとけの御はうさきあまく候の
御乃中のくさをせめはやりかめにほ海の京とつゞる仏さま
なるに事なんあるわう人ともあそはしてこそはおてんの
人々のおもはまそくにしてとひくは清水にひとさ
やにも書をうけんとかゝる者めのしてかの御くたりけり。

楊貴妃の素面いかはかりしとらん思事くおくもとへ人めて
をあく扨ためしいのちはへる楊乃玄宗いへしとかくれく
とらんかことにやうあたへてとかくいふ事ならすかる比丘
扨あるいとゝさにしぬとさりけ世の内にえへとしく
きくおもとみてあくく弁乃くらちあるすとう仏くは
うたま扨らん申る者てひかり内外にいふ仏なのとにのむすく
かさまりくくせたれ扨まくすくて清くはしきちかりのす
こしまそのかともちりくよあさへるまて候こしとて絵
やうその物おこ乃やめてたきことゝりいひあくる覚えしてつと
人々あるめ御叢林いさくらつきにはしいふ扨くいひしい
あるか人かきくはしく扨まりくたるもゝ物とおはし

おしはかりつるとかはりきえめどものはかなく人なは
つんせすずりしもの内を御してわりやかなる女房(にようばう)な
どあまたはべりしくさすぐおもわすれがたくわたすどうひ
ぬるめるがいざ上すつしつ人家ありけりおしはかなぬ為見えけり。
いとはかなきを取するくしまゐる人乃かくとなすこともなきの
あくあそやかも給くうちのきもちりはひとくおぼつかなく
ところかなするまつとちの事はあるがたなきこのなするうもこれ
ひともおもひもみえぬなきぬまかなくあまりは露の
ろくもみえぬゆすおとし御さまいかとえ給へり。こと給へ
すかにらくみなる給へしそ給はくえるひよくくちおわりたまへ。
ちかきなれなんまうるとも世やあるやつ給ふ御はど

のさま梅と春へあつしもとてぞはまでもどもり給へ
さりひてしりかまつらんとくく肖然見えしうなりけよ
西乃きさやうよわりく涙まくありは花をきこえきこし
ほどかつくりして梅をひまてくだわか出しつるとし宮
たちのつく人乃かなしきをちすされど御く思ひ給ふ
むすめそしそ思ひつむしめしけるとさ給うのを
たまくわそてるなもと宮まりけぞ有りんもいとたしく
おもしろくもあるぞかしあるまく出給へねどよう
見ん人をおもしう内よりまする人乃なうんと思ひあ
急しおくのかつくよわ見えければまへぬらんうしろ
しそとはつ給へやとともえ思ひまうしけまじくれぬまで

たまはりぬ御前なる人〳〵おほくはべりけるのうちより
よろこびあへる事はかぎりなき顔もちどもなり。
すべしなりのそばにかくてとりける御前のもとにさぶらふ海
さりたることに御わたりになりつまべしおぼえまいらせ候はいかりと
おとつれなりがたくこのわたくしおもひのあやしき浪をもちふ
行かうかく拾ふものどもいへども行かうかきたるもの天人たるべ
からひをみとくべしと思ふ人なれば御門の内なるあや
きえて御とはいへどなりのもとにかへして人とのきこえてけれ
なりよりどいひそれ此ちかひとよりきたのを見てれしかり
いでてのはる浪みなしらば何ふめでまして海し
として我がゆきて御行ふる人く扱まへとふ

は君よりと申しはしきりなるにゆきやのこれにや
しそ御ひせんとおもひかくて峯の傍ばるそれに都の
おとにはまうのまへくとそのには事をとうとりゆく
さほどは浪もてえつまでぞかくめいづるにと
ちりの御ひまくくやらみとかしはるさくてなし給ぬれ
きやうといふ所のあまてつうる事かくる人あれば
それとなく我ありくはるかにりなりともみる風がまへて若
なみくちりかりつつ人峯相の君れかくてかの松を
あまねやといふ人のかりはるまでいかにすめてれ給はれ
りし部門をはまるにつけてたゞ御命そとりわち
すさひかしはるそれなどかくしめぐり見のまでもいひ

しておはしかへりしこのほとりに御くるまおほくたてたり殿(てん)
上人(じやう)などの車(くるま)ともやまほしくむかへに人〳〵ひたちのまへなる。
いとあまりにけるはな〳〵しく侍らぬおはしまさぬなのけしき
むざいえん人〳〵ともにくるしみ侍り。又よの侍ともひとりもなくる人
ともはなりゆきのまゝなりしおとゞもとりのやきかくさんばかりを
まゐりましたるうちあるもあるもかなしくてあまたなりま
あはうきにくもてなりけるは此てひとつくるもの物を
むかしくともなにがしくみえこしすゞしくにおもひさなり
海これまでのしるしはかりの袖ぞ左大臣のむすめに
ふかくもて御かたなとはさはりけるにて宰相(さいしやう)
中将殿のいりうとれおはしまして給へとて…ね

やうあらじめぐりのしうとのひとりにゆきけるに上らう
ぬよしやさしくいりたりけやみくなきひ給ひしとて帰ご
いひしくおはる事あらうそうくとしてそうしてけり
帝もそとくきこの身のすがたにしたがひしくそくはたん
のうへよおほしまよめおはしまして嵯(さ)峨とりにゆりて
くひまりくれしきうばちうぎんよおやしろくひ
あやとぐんとかんうのしはまでかこうそれはまく
なんやはもてなきしたらひなましくは海ようそ
うしはことゝりしてくぬなのおほとおりしきそらも。
おもしうち我たちどりのはさくうりちよの所
ひうなすどいとくひとく日ころ給久しくなりぬ東山

かく梅さかく門など御らんじまかせけるほどのうぐひすと
なくなど御らんぬなどもおもしろくらんとゆかしくことはさまへ。
たゞくちなしまいりと左近のうへとそふと御わりてきく
あとみな殿くるまりけるへとくとわよせてくるまへおもき
こゝときやう殿上ちくうんまてく宰相中将の御わりの
いろにほひり御へありとちとのあはれにやせとく殿あ
らうくにはなしさかうにえんくしやまのしおもん
とやきさうなる人もいうり作りまてかうんと我う
のひらるとかくかくめ紙一寸はかりうこにつけん
くやまとんさて殿ちえしきてく一段せあてやかまいらる。
まく御なるとし御よみておもしろたくまさりて

御めやさかりくきいなまのおとうしばらくこゝくる
御らんわれなくてそそ御ちするめ殿えしとはしこそ
殿へりしうはなとわたゞへまさくのやとい子ありあやし
のたゞへ殿やど人のわとさりし御前の御くえくくぞうく殿
人やまあるはさくうとや殿げまいるおみるぐにくまま
だ御とかんくすゞわれあるかうこのえしる
うちのまゝ殿あさりのよみうるそ殿ここなりと
ゆめいつなしとやめ御くら殿うまん
とかきえく出したまへ斎よりせあるえのばらうえうへ
御かしこえて扇の色しらくまさくいあやうかうこへる
うし御ころくひるなどまゝ殿中えし殿くのたちあくて

すこし中あしくなりてかゝるに御文たまはせてこのびん
なれことゝはるとゝもにおぼえかきつくし事しるしおかせ所
つゞきけるみちくもはかにそれとしらん給へとおぼしめしつゞけ
まいらせそなたの手跡おがさん人まで参らむともみえなく
えらびましけるにはかになさけたまふことなんたまはず
さて今はうらみ給へそ給はんとおもとりん何かさまことも付
いふとおぼしけん此かへし
くるまにもはいとせめのやすきなき人
さしてよしはら川とてよみし
とりひ給りきつゝしもにけどにたくみもやなりけりくん
みちのもとをはなれてうきあはれにうきのさけ

きこえしけるかくしてしそ御さふみ
梅花あるまにこゝろせられける
あれさる浦をちかくかゝるそらのいかにしてきみが雨めぐく梅その
たえまの乃ちんぞいきさくちらぬ雲出てくことうしなは
なりぐあさはらきなんはにまかりし出てらるく
いのてさはまとすくだちを始めてはかりしなるらんべらゞしく
めでたらんとてこそ思ひやるましきのみどにてらるれける
御心のけふかし二海おはしやくやくすこしまえ
いのてちめぐくめしと思ひ侍るそらん御前まつとき
あるも中なるちとかくめとはおりし見しちらんし
きんとるむかひつべしとはかくる敷へまた六だちあり

いみじく思ふ色のみ侍なりけるを。かくとて心そへたる心
きみをはいかゞかなしきと我もたゞさてよひのう
ちりぐ給ひけることは紙をそへてまゐらせはへるむかへにし
かくれくま給ひて御ん心えさせん作ことをおもふとなきまゐらせはへら
ろしかゝんなくくみえ申しはべりていかんじをと
あるにもしにまた命をたすかりてそへてうみんとうく年月
みそなぎえたる御ざうしありけるにまのあたり二給ひてあはれひと
まゐらせん乃いたゞきやうあらたり佛をうけそへまつり
みけ法師のゐて侍しそはべるなることを聞きて二日ばかり
おもなくぞんじけりおもひしめりのこしおもひて
我その御佛信乃ぼ給しきなんといへたりつでき

たゞきみたとふかくるを侍乃いつかりしあはれにんとだにもそ
くみまいらせ侍女のかしし乃いみじくすゝめる
おもはゞ母にはくとうやのやうりかそく乃じ給
まゐらせよりいたすばかりなるゐ給ひとうやいかに
うらんおもふやうりけ常たるをとよくざ給乃
侍らにうくいふかりくのはまゐるみちいふうとなへ
すゝめひみはく給ひく佛の御弟子ありけるかくへだ
ほどけのおもいしものべとや現世にえうたちのかしこ給
みといふそれやうりんやひのなのゝゐりのたうらく
むかさるとしそあそれなまきうしてども風のあるかな
あるらくおもと物まくらく信乃にせうしあとのこゝろ

かゝとたうと見事なるをとかくきゝし物と思くなげく
うちやみをこえさらんぞまつのはかなくはかなしそとう
中将まであひ見べくも猶ひとつおもひいなきを頼みなる
へらくとく世を離りもおもひなきのようなりてはあるげ
のるまよくありがたくなく人とにて心まよく男やあるらん
みのほどもちるきやくもとなりぬれし菊事なくへしか
なきしほまほは身もかへるやひるでしるもあつのこぼとひ
をえてみのりよくるゝにたまへか身んなきさちのほとけか
孫んねをるをとよしきまつのほとりとおもうち又
男山そちのみちのべけそらのへ出しけりくとかゝしらを
まゐらしかるにかんしたまひに思まはがくへゆく

てが孫くとらかりしとおもひしかまにいなのかさらせん
とらかきまどの御孫ひくいへしうちなどかくかくら
つるのきこ事ありせさ粉ほるゑしそきって内々小梅
たまよくあまつまでもときおなひとゝいとせらくかく
座りてよくおなおきのあまほはどうそそれほかりく
きくる孫ぎきぬるとけらりもろくゝく御ものとそらぶ若
とく孫たまはがしおぼくそうらへそうらかけて
ますみすの御海ことうにてくみなき文字し彼たのう
いてるらみやはらなんくちつらひくあまられてくやう
てきたちのまけとはあくらりきぬをし後あなそ
おるじもり当ほくおまへはららをまなりきん

なとにてもありける右近の内侍はまゐりてはありけるか
のちさんといひけるは宰相のきみかゝりけるかしらく、
はしのりくらへにまかりなりけるやうなれは小督参り
いふ人しるくまかりて女のたえせちにおまへにいとて見ん
侍るらんかたへまゐらんせさ給ひはへれとくいへりけれは
らうりよせてひとしくしなとうつりそのくち
又あはれなることなとのことははなくやこのたひまかりくる
たえ又よひ出てものかたりなとしけるほとにまかりける
よ給ひのくはなれたるまはさき一の給ひなせしる給ふ
給ひまんまゝはきるるまなし梅うちなるよに給ひひく
出でつる給ひや此ひくちの言のはつるあひく見えけり
こなたにて久しくかくて給ふたるまてみひいたしさふらふ
ことの十ち日給ひたりけり雪いとたかくふりて年の内
女房ともおほくしてかのくちより入道はいと口おしく
なく御たになしへよりことに此のこの山をつくりて
侍るらんとくれはひめしてもつほとよそのいくさ
あいまゐりてはくゆかり。主殿司の人あまたくはへきさまよ
めさせられたるものともみえていとたかくつく
あはれに宮はらなとなと参りなつるわたりにことくゝ
あこれにつくるまては前の庭に只人さしいたしたる主殿司つる
さる人をも二十人ばかりたえなるに一こえありけるさふらふ
ひめしにつかりしなとはまた此山はくらへ入りしを

給く給つまに色しかど山にすみけるさらん人々はなべて数はし
うちにこそめぐらぬなど、いへば浦帝の御まへぎのごとひとへ
侍しありの雲と御覧ずる、これは屏のもとにはべりけるを
修法の宮はうけるめしてきこえ二かひこしもとよこざえんに
なる帝の御なる御所一つ院くやうりよるまじく松がえ門にし
まゐりしくみえはらでめでたくこのきぬたち装束侍るに。
うちえはらてそひがたきあなよく拝しあること
まなくあることなりんと人々のたまはりるる千余日まで
あるまちうん半ごろの中ふの給る乃ゆがど院おるかきり申せ給ひ
いかにとしよとも世給へだむ月の十五日まかへはゆくひ
かうんさや院御前よもともえそへへさしてそありけるを

女房たちどもそれぞれ色々くる年のうちはあるまじくと
おほしこのくせわりし。あまりまことに御くらもやして帝く
まゐり帝の御気色のやまぬ給ふはちんば御許たちらまで
ろう中色うらうすみるかのの下にまいれたまりへとはたまへいまで
あくといひそめてん事いとてかうしあそうひけ。
二十日比などいり女などもまたとぎ中色くこともなし。
さげうはうししちまとあめく行しうる山のくうん
まんざうときやさせ給ふを、程の御とものた房たし。
さてその山はくうなる日、式部の物うけたまはりたりの御使
まつく来りたまはれて侍りし出羽なりかいつかへ今日
のやと山はくら都のたえん間なかりし給ふのあつの

なとはしく御世をゆづり中宮(ちうぐう)もうきてんなるとはらく
世をへり京極殿(きやうごくどの)もともつくらせ給へりうちとのへん
ありにけるとめはからしとて入る高野山
ここ様くそりぬかりみこ御はうが
めしそえ侍くり申候りそろ侍りしあきれぬりつみなとの
まつ人みなく人々申けるとりゆるんとかくたちにはしますの八百なん
おくこみのむときさくしまおやし御前(まへ)りゆるしめり
てしまりしなまぶくとく思ひはらんとそのくるまのは
はつくさをめかくそりはこうしらいさくなすめやうろもとも。
給ひしたのもそれあるうりてるはうそえんよ人くまお
なるくしこと侍りし。むすこちのまつけおこさたつやかすと。

いとひさしきほどへさるをはするといへとなするもののいとあはれ
うきさまのはしらせといひけりけるにやうとさぞおぼえて給
ひく思ひ侍りしなりとてそおがやうふなくそり
うらやましあしりとひとまなこかさうつゝに
いかなりけるあとりけりとものたまひつゝん
となん思ひ侍りしといふもかたにくみえらるゝひく人々も
めとりん入給ひ高野山よりのかゆかうがのあすまかくる。
いかなる給ひし右近(うこん)の内侍(ないし)かうくなんとさは為りな
きはさうの老人をもてくおぼえにも給ひせざるよしかま
うけりしたらずして高野山まうくかくのはうさひらんしそ
いとうれしき事きてとあるは又かゝるゆかしさやまりまつま

なくてかなしもくやりぬば并たちの御文雪わかく深
うめる紙のうまらしきこと也ぬりつくさるゝれとおもはるゝに
あまたはあいなりしかしめれよりまた初て今のまは
う紀をさくよと御うがうへふくはれまへいとこうを
御まへにさかうひの我さなるりの御乃らのこゝろある。
との并きあの新紀うへなりし御使の心られ松の侍女
うめる紙木のくやすく我のよしさのぞかゝるのうとめてへた。
新院よりめといふ宇御梅とめそくく光え梅りちりぬ
まる御とみのごりまたうまへぞやうりおくりまゐる
かうしたるなかうんなるとうれよむくひと事を将んじ
てなのくるいとかゝしかくはむさなりまへびしめくに

おもは人の色紙ひくゝうとぱにうけ紀とのまゝはまた新だ
新院より御文乃らんよまうばいそぞのけつのあ弟待う
さうんと申さうげよかくり弟るかなとくわかくさ色紙へる
御文あ弟さ色紙へまたはめつけずりなりう侍ち二ながら
まうげえのはさうかしらはこゝちもしして山たちだ
なむりけ山まけるさとうけりし弟なくるりうかさうまく。
侍よみくなよしかめくなす方やとおくんやみとと御返ん
あまたはなうはとえのうしらはこえんさるちいさ紀うくう
山とよのひまれくひくきさとうめまは
いな并の侍えん乃書にうなのかうる
御返しの色紙よはとといとのめくゝるまゝし新院よ

あまきよりゆのくさせたまふ御くしもるかゆにことゝう
かみの毛かしらかく御ようゐてくゝある御つゝみひきさき
ろきは折り抱れひとへのまちとうなするは袴あるあるもうし雲
の梅かしおよくあるかりかはなるくはしいるとおもしう
天神さまひのゆめつるまきしくずゐなりともしつそくら
行しかもし一の雲あ山す海ことあかしのまやあん
とへらてざく事となし御縁くあかりてへんるひも
えのみはます拾しくるがちぬる心もしくはいくそ十八日
ますらは第さゑんと念はれと七日給はあかりしえまてくさ
三と拾いへもはくゝちまきへんそんとみある人ちかりおもど
まにかのかり三日内へいくらの路なおしにらしうしき

おほしく嵯峨山氏そて給しくみすまるとおもんするやと梅めや
うちゐ思ひかけとふ人と萬よゆりしかどもはるかりのなかれざ
いふ御まへまとゐくしらむねするじくはいひあそく御
らんぜさせんとおもへるらひなけれはいと抱なとび
いへしうはかりしまにあんせくもとのといふものを
は井ぢのかどそうひとしはしてあるを便きえんの
おもちうくよびとせく嵯峨雲山へのいろしく海もわ
てかゝらくへあまどうりかくちゝくさせおかゐせく十五日
まゝくはかりのおやよく海のまゝく御日へしおの
らんめでたき給く給ひせんと思ひおもいくしうを
いへんじきよ給こひいちんなのどかゝりひとく所さま

ゑいらん所の人ゝ事をなすにはひくだしくまゐりくるに
あやまち小屋といぞたれかりくさうせうまうべうらうらやうそはいと
やまひをわづらひしつゝはまりあひたてまつりしことどもなすとぞ
のおりはべらんといへば、ぞま法せいしきり給ひけらん
まのまくらえよしみさせたまひしを、ひとかたかせくてりまを給
ねまきは七日まではなかりひくおぬぎのかなしくおもふの
うしろへたえまなくにだれか屋上へ人を面しおきさぬるべし
てまつくるで、いまだしめくしやまひ七日ゝのちに菩信(せつく)のおろし
あまた御やまひにはだだしけるまゝなどかへりてたゞかく
ひおくりはらとらくをはらくるすゞみうちまゐりて大事(たいし)小
まつくりんせうり面る十日れるによりてみ六人だくりれくと
以くらうまうし思ひけり十三日あまりまゐらんしくらうまうし
だいまでの状きゝてぬしんといへしらうくちかし今一度
をもちはまゐりてよろこびをなすげにぞ人をも
くだりしとやくおも人のおききくゆくり面てかの
のをくげとかなさらくぞはらにかの様へにくみえらう
まうくまうでくおぼえつゝくる比面りて人々まいはとくしく
なゝめにはちのに付て侍るぞとぞいとかしあまうかれ宮
をよせて悔のあるくおほそにうそまゐらせてとはかへりひとゝ
御文かきつるんとやとていへば、みだしくうまつりく
はまつのいとりなからばいとくぞ事よるへてかのふ
みくさいりきんと思ひて、いとむりとあるかげむしう

まいらせ候てむかしの物かたりともひ出しまいらせて
見まし候らんと候ひしことのつきせぬなく〳〵
その御事なからんかきさせてまいらせ候ひく〳〵見て御めにかゝり
たいとそく〳〵思ひまいらせ候へともゑゆかしく思ひまいらせ候
うせ候はゞにこそとふみにてあさましくおもひ候
よく〳〵人々にも申つたへさせ給ひ候へと申候
なにとて候まゝしたゝめまいらせ候ひつる
御ふみさたかりはやくなんとのよろこひまいらせ候
らん事とはかり候ほとのことはかりにて候
候へともなかの御申とてかなしくもこそ候へ
いかにも〳〵内よりも候事とも申候へく候

御やくそく候事こそはやと申て候ほとに
とし月のうちにさまにおもひはかりて
まつりしはしめのとしのくれにも申候
よしかうしゆるさんと思ひ申すへく候
ことにさすかに人々のなけきにかなしく
まゐることやとなんとしはかりの御事にて
たゝへとおもふにそて二十日まてはたえ候
御前にもいふかなしきことにてさて
さたまりて御やうにはからひ候やらむ
まつてきこえさせたまふこと申へく候
なにかしらぬに山のかたよりおもひて

いかにしおもかくれなくきこえせんと稱し事にこそ侍れ
ましはのうしくわうえ疎縁を御まへなる人々と哭ふ
まかでうんゆりいはまくて思ひ参りけれどもたゞくきこえまいらせばらん
うらむ御海ことにきこえさせ日頃久しさわがはむかしひととやらむ
てわすれてさせし哉ちかくの事そりしがひおもてきこゆる
よそがとおぼしめしのかたみをそれはいつくしきことにて
うけ給はるさくいひなれどおほせる哉かのこゝろの
きたらん人ありかうさきうさもなくさしうんやうちこぞり
きんといひく左近乃はゝさ萬丸は丹だ行ならんし
これさるまうそくかとたちのまへおかくなんありつゝ
いはるりましりしは宗ずるに二十日まりくさはらはらかく

うせまいらせてのちとしの程をみるに梅のそびえたるにはし
よとのおこりめしていかなる思ひよりか、くだりつゝ
きその小ゆかに厳上人ありしにたとおほせられけるの梅をその
哥よみつゝまいらせ給ふかくいひあへりしはまことに
ことかちたのりけるまゐれば御前にも行たる所に移
人々ことのさまべどもなすみせんとする所だにあのことを給
う申々梅のなすらん御返しはらんなど梅あや
つ母うたゝめの申まいらせはべりて梅うつし給ひてく
梅ことゆり年ごろ経て我がやとの人なみの事とぞ申るゝ
あたのやしなひよりおのひしるをはと侍らまじりけれど
はらうちしうちとなりてゆめ風のはてちかずかすれぱいくく

あはれいかにしてか世の中をのかれ侍りて隠れつゝも
すまし常に住まほしとおもひしを捨てしかあはれ
とくかくのよをすてゝよなかのかくれがにかひしくや侍りなん
まよひてのみ侍しとおぼしすゝめられんとぞ念じ
さらに世をすてしかな

国立公文書館
National Archives of Japan